



Title	室町時代における政治秩序の形成と顕密・禅宗寺院の歴史的位罫 [全文の要約]
Author(s)	高鳥, 廉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13398号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74559
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Ren_Takatori_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 高 鳥 廉

学位論文題名

室町時代における政治秩序の形成と顕密・禅宗寺院の歴史的位

本論文は、室町時代において、将軍ないし室町殿（将軍家家長）、あるいは足利将軍家を頂点とする政治秩序がいかんして形成されたかについて解明すべく、足利将軍家と顕密寺院・禅宗寺院との関わりから論じたものである。そのなかで、寺院が「第二の世俗社会」となったことの社会的意義や、室町幕府が禅宗官寺を庇護し住持任免権を握る意味を探るため、①足利将軍家と門跡寺院との関係（第一部）、②「室町殿」「北山殿」と祈禱との関係（第二部）、③室町幕府と禅宗寺院との関係（第三部）という、三つの視点から執筆している。

第一部では、将軍家や室町殿が、門跡寺院といかなる関係をもっていたのかについて論じた。特に、高次な家格としての将軍家の「貴種」性に注目している。第一章では、将軍家の子弟や室町殿の猶子が顕密の門跡寺院に入室していく契機について検討した。本章では、子弟や猶子の入室が「貴種」の払底を補填するとともに、室町殿と擬制的親子関係を取り結ぶことにより、実家たる公家に対して家格秩序における将軍家の優位性を示していたことなどを明らかにした。第二章では、将軍家の庶流である足利満詮の子息らが悉く出家した点を踏まえ、彼らの寺院での活動や室町殿との関係性を論じた。本章では、庶流が将軍家内部において室町殿と差異のあるものと認識されつつも、公家・寺院社会においては室町殿との血縁が重視され、儀礼待遇が徐々に厚遇されていったことを指摘した。第三章では、将軍家出身僧の儀礼待遇が「貴種」と同等の待遇であり、室町殿御連枝が当今御連枝と儀礼待遇上で同等な存在として位置づけられていったことを明らかにした。この点は、将軍家が摂関家以下とは隔絶して高い地位にあったことを物語っている。それゆえ本章では、将軍家が実際に得た、摂関家とは隔絶した高い地位を「准摂関家」と表現することは適切ではないことを指摘した。補論では、室町前期の比丘尼御所に注目し、室町殿が附弟選定・住持任免に関わる意味について考察した。その結果、従来いわれるような公武間、あるいは将軍家と伏見宮家との間における対立史観で捉えるのではなく、双方の良好な関係を維持するための附弟選定・住持任免として理解できることを示した。

第二部では、天皇・上皇そして室町殿という、室町期における上位権力間の身分秩序について、祈禱を素材にしながら考察した。第四章では、顕密寺院や伊勢神宮などで行

なわれた祈禱の主宰権に注目し、北朝天皇家を輔弼する立場としての足利義持・義教の姿を描き出すとともに、従来ほとんど論じられてこなかった義持と義教の共通性を明らかにした。とりわけ、義教と「北山殿」義満の類似性を限定的に捉え、天皇の輔弼役としての義教像を提示した点は、研究史上においても重要と考える。続く第五章では、公家祈禱を差配し、後光厳院流北朝天皇家の権威を保とうとする「室町殿」義満の姿勢をはじめ、義満が行なった祈禱の意義について論じた。

第三部では、室町幕府と禅宗寺院との関係について論じた。特に、これまで朝廷との深い関わりが指摘されてきた大徳寺や、相国寺を中心に展開した将軍家の菩提所、五山派禅宗の人事や遣明船貿易などに関与した蔭涼職に注目している。第六章では、大徳寺が十刹とされた時期を再検討し、義満期ではなく義持期に十刹とされたことを明らかにするとともに、それが山名時熙の訴えによりなされたことを指摘した。本章では、五山派以外の大寺院にとっても、官寺制度が無視し得ぬ影響力をもっていた事実に着目している。第七章では、足利義詮の菩提所である嵯峨宝篋院が成立する事情を検討したうえで、その住持を務めた泰甫恵通という禅僧の足跡を辿り、将軍家の菩提所がもつ求心性や、後援者である細川京兆家の手足となって幅広い活動を展開する泰甫の動向を明らかにした。第八章では、明応の政変以降の政治史を念頭に置きつつ、戦国期における蔭涼職の展開過程を復元した。従来の研究では、戦国期における蔭涼職の貴族化現象という一面から、蔭涼職の「虚職」「名誉職」化が説かれてきた。しかし、明応の政変以降における種々の政治状況をはじめ、足利義晴期に側近を中心として構成された内談衆の成立などにも、蔭涼職の職務が漸次減少していく原因を認めることができる。本章では、貴族化現象のみでは理解しきれない、蔭涼職の性格の変化を論じている。第九章では、戦国期における大徳寺の地方展開について、大内氏との関係を中心に論じた。大徳寺は、中央・地方ともに幅広く関係を維持した「山隣」派の寺院として知られており、戦国期には多くの地域権力を檀越として獲得することに成功する。本章では、大内氏をはじめとする地域権力の側も、大徳寺が有するネットワークを有効に活用していたことについて、再度確認した。

そして終章では、室町時代の政治秩序がいかにして形成され、それと寺院とがいかに関わるのかについて、結論と見通しを述べた。まず、公家社会の身分秩序が寺院内において再生産されることにより、世俗社会の身分秩序が安定的に維持されることに繋がった。その結果、僧に対する儀礼待遇なども、世俗社会における家格や地位に合致する待遇が求められ、先例化が進行していく。これによって、寺院や公家社会における身分差がより明瞭になり、室町期には天皇を頂点とする身分秩序が安定化していく、という見通しを示した。また、こうした身分秩序は、上位権力のみによって規定されたものではない。僧侶間、あるいは僧と俗人との間で、儀礼待遇や上下関係をめぐりしばしば論争が起きていたことに加え、伝奏をはじめ、先例を集積した公家衆らも、公家・寺院社会に横たわる身分秩序の問題に積極的に言及していった。このように、上からのみではな

く、多方面から身分秩序に関する認識が示されたことが、その秩序の一般性を担保していたという意味で重要と考える。

さらに、上下関係を識別する手段が複雑化することにより、身分秩序の認識も細分化していく。中世後期の人々は、身分秩序に関する何らかの論理に基づいて、複数の人物の上下関係を正しく識別しようと試みていた。そして、この論理から室町時代の政治秩序の一端を見出すことができる。世俗・離俗の範疇を越えて、世俗社会の身分秩序が寺院社会にも導入されたことの影響は、きわめて大きいといわねばならない。

そして、こうした秩序形成に重大な役割を果たしたのは顕密寺院だけではなく、禅宗寺院も含まれていた。将軍による禅宗官寺の住持任免権の掌握も重要であるが、地域権力たる大名層所縁の寺院が十刹・諸山に散見され、それらの頂点に立つ将軍家所縁の相国寺が五山に列位され、その塔頭群が足利将軍の菩提所に指定されていたことも重要であろう。すなわち、将軍を頂点とする社会が、禅宗官寺の社会にも適用されていたわけである。戦国期においても、将軍家に連なる血統が重んじられ、平僧であっても室町殿御連枝であれば五山長老と同等の待遇を受ける、と認識されていた点は、将軍家を中心とする家格秩序が禅宗寺院にも形成されていたことを如実に物語っている。

以上のように、実際の世俗社会や「第二の世俗社会」という、公家社会や寺院社会の重なりに目を向けた時、将軍家を中心とする政治秩序の形成と浸透過程において、寺院社会における身分秩序の再生産がいかに重要であったかが改めて理解されよう。